いじめに思う シーズン2　語る・かたる・エッセー

中高生とともに差別と闘う

『徳島ラジオ商事件』

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）

おっちゃんく

今春、三十八年間勤めた学校教員を退くことにしました。学校を離れるに際し、思うことは多々ありました。この後どうしようか、のんびりしようか、旅行三昧でもしようかとか。でも、どれも今一つピタッとしなくて、やりがいを感じなくて、あらためて自分を見つめ返しました。そして、最期までやりたいことをやりたいなと思ったのです。それが、人権こども塾「数学教室」。自宅を改装し、専門である数学教室を開設し、来た子どもたちに人権こども塾でも学んでもらおうと思い立ったのです。

私も中学時代、数学塾に通っていました。ところがそこはちょっと変わった塾でした。「塾」とか「予備校」と銘打つことなく、「どこ?」と訊かれても、「おっちゃんく」としか言いようがなかったのです。しかも、古びた自宅の一階和室二部屋を丸々使い、二十人くらいの同級生が座卓で黙々と問題集を解いていくのです。

塾の先生は、私からの見た目ではお爺ちゃんで、初日に「先生と呼ばなくていい。おっちゃんでいい」と話したことから、「おっちゃんく」となったのです。そして問題が解けなければ、「おっちゃん!」と呼ぶと隣に来て、新聞広告を四分割した裏面に書きながら解説をして教えてくれるのです。矍鑠としていて、どこか威厳があり、畏れを抱きつつも、親しみや信頼を感じる存在でした。月謝が激安だったとも記憶しています。とにかく、不思議な塾でした。

そんな「おっちゃん」を、私が二十歳くらいのときにテレビで見かけたことがありました。それはそれはビックリしました。

「えっ! なんで? どういうこと?」ニュース映像に、大勢いるうちの一人として、よく見た顔があるのです。

「冨士茂子さん無罪」

「何? それ」でした。

徳島ラジオ商事件

一九五三年、徳島市で電器店主が殺害される。そのときの内縁の妻の冨士茂子さんを犯人と断定。冤罪を主張し続けたにもかかわらず、裁判が続けられず懲役十三年が確定。服役の後、再審請求を繰り返すものの、六十九歳で死去。死後再審が開始され、一九八五年に無罪判決。

私が見たニュース映像は、その無罪判決が確定した瞬間でした。そんなことをまったく知らなかった私は、本当にビックリしたのです。「おっちゃん」は、冨士茂子さんの弟さんでした。当時の私は、それでもこの事件について深く知ろうとはしませんでした。

一九九五年、当時放送されていたテレビ番組「知ってるつもり」で、この事件が取りあげられました。その頃の私は、ちょうど部落問題や人権問題に深く取り組み始めていたころで、食い入るように見たのを覚えています。そしてようやく事件の概要を知ることができたのです。地元のこと、まして人に関わることを知らずにいた自分を恥じました。

またその頃、当時の勤務校の人権学習の取り組みを取材に来ていたテレビ局のディレクターの方から、開高健の小説「片隅の迷路」を紹介され、読んだことも大きな衝撃でした。

「おっちゃん」は当時、事件についてふれることは一切ありませんでした。それは、何か心に強く決めていたのではないかと思います。贅沢もせず、慎ましく粛々と生活されていたように思います。そして私も今、人権を軸に数学教室を開こうとしていることを思うと、不思議なめぐり合わせを思わずにいられません。

とはいえ、入ってくれる子どもたちがいないと塾は成立しません。数学だけではなく、人権や平和、環境問題について学ぶような塾が受け入れられるのかどうか。この原稿を書いている段階でどうか。皆さんに読んでもらっている段階ではどうか。

「徳島ラジオ商事件」。私ですら、関心がなければ知りもしませんでしたから、より若い世代は、地元のことと言えども他人事。知りもしないでしょう。そのことも、関わりのあった一人として、子どもたちに伝えていきたいと思います。

小さくても少なくても、いつか教室の門戸を叩いてくれることを心待ちにしたいと思います。

私にとっての学校

学校とはつくづく特殊な職場だと思います。いくら親でも、子ども同士や教師と生徒の間に築かれた絆、教室や部活での深いつながりは分からないと思います。それはそのとき、そこに居る者にしか分からない、形のない、感覚でしかはかりようのないもののように思うからです。

私が人を信じて待つことができるようになったのは、子どもらが持つ可能性を見せてくれたから。

感情的に怒らなくなったのは、子どもらが打てば響くことを教えてくれたから。

毎朝届いてくる生活ノートを読むのが好きでした。私が文を書くことを厭わなくなったのは、この生活ノートがあったから。

部活動で負けて悔しくてみんなで走って帰ったこともありました。子どもたちのハッと気づいたときに見せる、花が咲いたような満面の笑顔を見るのが好きでした。全力で悔しがる姿が、全力でよろこぶ姿が好きでした。

人権学習で本音を語り合うなかで見せた涙。この仕事に就いてよかったと、心の底から思いました。

まだ誰も来ていない早朝の教室も、みんなが帰ったあとの放課後の教室も好きでした。

困難なこともたくさんありましたし、失敗もたくさんしてきました。決して褒められるような人間ではありません。それでも私は、今の自分のすべてをつくってくれた学校という場所が好きです。今も当時のままの中学生が胸に居ます。そんな思い出のすべてに感謝の気持ちを込めて。

三十八年、ありがとう。

イラスト　中島　亜唯

※T-over人権教育研究所　https://t-over.net

国連NGO横浜国際人権センター・うずしおブランチ
T-over人権教育研究所・人権こども塾ニュース

板中生とＴ中生の交流全体学習③　～平行線で手をつなぐ語り合いの部落問題学習～

板野中学校の生徒たちは次々と挙手し、資料『自分以下を求める心』を読んで感じたことや考えたことを語っていった。マイクを握った生徒一人ひとりが、部落差別の解消を願いながら、自身の思いを自分の言葉で表現した。　こうした語りの中には、資料を通して自らの生き方やものの見方を問い直そうとする姿勢や、仲間の発言を受け止めながら考えを深めていこうとする姿が見られた。そこには、学年・学校全体で語り合う部落問題学習（全体学習）のもつ可能性とよろこびを、Ｔ中学校の生徒・教職員・保護者にひたむきに伝えようとする姿があった。

Y・Sの語り「毎日の生活でも、みんなが頑張っていると思ったら、私も精一杯やりたいと思う」

今、S・A君が弱い心って言っていたけど、私も弱い心があると思っています。人間には弱い心も強い心もあるし、それが本当のところかもしれないけど、私自身はそうやって私の心の中には弱い心があるんじゃって考えることで、そういう心を許そうとしていたと思います。人間にはそういう心があるから、私にもそういう心があって当たり前で、自分以下を求めたりするのも仕方がないかなあって思って、人を傷つけていたりしたことがあったと思うけど、この前みんなの意見とかを聞いて、それは人間として最低のことで、そんな意識を変えていくのが人間として生きていくことなんだと思うようになりました。毎日の生活でも、みんなが頑張っていると思ったら、私も精一杯やりたいと思うし、やりたいと思うことを実行していきたいし、さっき意見にも出たけど、自分を好きになりたいって思ったし、なかなかそういうことは自分に負けてしまうことがあってできにくいけど、頑張っていきたいと思います。

C・Kの語り「みんなで話し合って、もっと自分が出せるようにしていきたい」

私もこの資料を読んで自分のことを見直してみたら、やっぱりまだ全体学習とかで自分の意見を言っているけど、生活には何にも態度に表せてないなと思います。どうしたら態度に表すことができるのかを考えたら、一日一日生活ノートを通して自分を見つめ直したり、人の意見に惑わされない自分をつくって、自分を表現できるようにしていきたいと思います。まだまだ後で何か言われるのが嫌で自分を隠すことがあるけど、そういうところをどうやったら直せるか、みんなで話し合って、もっと自分が出せるようにしていきたいです。

C・Tの語り「自分が精一杯力を出している時っていうのは、下の人を求めない」

自分が精一杯力を出している時っていうのは、下の人を求めないで、もっと自分を伸ばそうと思うんやけど、自分で満足できない生活をしている時は、何か自分の中でイライラしてくるから、自分より下って思う人をさがして、そのイライラを押さえようとして、教室で「昨日勉強しなかった」という子がいたら、変やけどその子から元気もらう時があって、そういう時の自分はやっぱり嫌やし、そういう気持ちをなくしていくには、自分が精一杯の生活をしていかなあかんと思います。

N・Nの語り「自分以下がいるという意識は、自分は有利という自己満足でしかありえない」

自分以下を求める心について、さっきクラスのみんなから意見が出たんですが、自分以下を求める心というのは、部落差別や他の差別につながっていくと思います。自分以下がいるという意識は、自分は有利という自己満足でしかありえないし、自分自身の中にも自分以下を求める心があります。その自分以下という心にどうやって打ち勝っていくかということは、自分が好きになることや自分に自信を持つことという意見が出たけど、その通りだと思います。

自分を好きになったり、自分に自信を持つことがどういうことかを少し考えてみると、それは自分に嘘をつかない生き方が大切になってくると思います。僕自身の中にある自分以下を求める心というのは、自分が一番下になるのが怖いというのが、僕の本当の気持ちです。自分が一番下になってバカにされる状況に陥ったら、自分がすごくみじめに思えて、自分自身に自信が持てないという状況になってしまうと思います。他人の生き方をとやかく言わない生き方をしていくのが、やっぱり大切だと思うし、自分自身に自信を持つために、日々の生活というのは、一日一日の授業を精一杯取り組むということが、自分に自信が持てるということにつながります。自分の心の中に卑屈なものがたまるというのは、自分がそのときに友だちに対して嫌な言葉を言ったときに、あまり自分に悪い感情がないとしても、やっぱり自分の中には悪いという感情があるので、それがたまっていって、自分が卑屈になり、自分に自信が持てないということになると思います。少し『自分以下を求める心』からはずれるんですが、部落差別の問題に対して、僕は周りの状況というのは、実態のない世間というもののせいにして、「自分は部落差別をしていない、世間が悪い」と言って、本当は世間というものが言い表せないのに、世間のせいにしてしまうという、世間のせいにして自分を正当化してしまうという状況が多く流れているのではないかと思います。やっぱりそういう問題をクリアしていくためにも、自分に自信が持てる生活をつくりだしていくということがすごく大切だと思います。

本気の人権学習は、――「すべてを変える」　うずしおブランチ共同代表　森口　健司